

八木 隆一郎（やぎ・りゅういちろう）

1、プロフィール

劇作家。北条秀司とともに商業演劇の向上をはかる。プロットは単純だが抒情性に富み均整のとれたウェルメイドプレイにすぐれる。放送劇も多く、28年NHK放送文化賞受賞。

<生没>

1906(明治 39)年4月 17 日 ~ 1965(昭和 40)年5月 12 日

<代表作>

戯曲集『赤道』『八木隆一郎ラジオドラマ選集』『八木隆一郎戯曲選集』

<青森との関わり>

大正 13 年金木町の明治高等小学校に代用教員として赴任、翌年五所川原に移り「3L」結成に参加した。

2、作家解説

秋田県能代市生まれ。本名財一郎。明治 42 年、母ふみに伴われて函館市に渡る。大正8年函館商業学校に入学、在学中クリスチャンとなり洗礼を受ける。大正 11 年函館の大火で母は五所川原に移り、12 年に同校を卒業した隆一郎も五所川原に近い金木町の明治高等小学校に代用教員として赴任した。14 年同校が廃校になり、母のいる五所川原に移り、ここで竹内俊吉、荒関秀雄、斎藤忠作、坂本一義、林柁次郎などを知り、「3L」すなわち LIFE、LOVE、LIGHT なる文学グループの結成に参加した。

翌年夏、文学を志して上京、本屋、ポンプ屋などの店員を転々とし、水守亀之助を知り、その書生となり水守経営の文学雑誌「随筆」に「越年小屋」「陽の当たっている障子」などの小説を発表、同時に隆鬼堂のペンネームで戯詩を発表。昭和2年母の死にあい人生の転機を迎える。3年水守家を出て少年少女小説、童話などを書き生活する。4年左翼劇場に参加、11 月、国民新聞の懸賞小説に「新

三稜鏡」が入選した。5年左翼の地下活動に入る。7年4月、新築地劇団の先乗りで東海道、関西、中国地方を回る。8年石井漠舞踊団とともに、東北、北海道、関西、九州、さらに満州まで巡業した。9年新築地劇団で「蠅螂」を上演、好評を博した。11年「熊の唄」が井上正夫演劇道場により上演、これを機会に井上演劇道場の活動に加わり、水谷八重子、北条秀司等と知り合う。

以後いわゆる中間演劇として「赤道」(16年)「太平洋の風」(18年)戦後には「故郷の声」(21年初演)「海の星」(23年初演)「幻の宿」(24年)「湖の娘」(32年)などを発表、北条秀司とともに商業演劇の向上をはかる。長田秀雄原作「大仏開眼」などのシナリオ、また放送劇も多く、28年NHK放送文化賞を受賞している。40年、水谷八重子のために「風の鶏」を執筆していたが、5月12日脳溢血で倒れ未完。同年11月北条秀司が補筆して新橋演舞場で上演された。42年10月15日、五所川原の岩木湖畔に3L会の尽力により詩碑が建立された。

3、資料紹介

○『赤道』

図書

1942(昭和17)年12月8日

185mm×135mm

著者最初の戯曲集。表題作のほか「野の声」「海の星」「希望峯」「熊の唄」の5作を収める。「熊の唄」は大劇場上演はじめての作品。「赤道」はシナリオ「南海の花束」を芝居にしたもので、赤道を越えての3600キロの開拓飛行を扱った作品。